

岡部コラム 1

與子偕行（子と偕に行かん）

理事長 岡部 俊哉

本年6月に火箱理事長から引き継ぎ、後任の理事長に選任されました岡部俊哉です。

甚だ微力ではありますが、公益財団法人陸修偕行社の運営に専心取り組んで参る所存でありますので、御指導・御鞭撻、御協力の程、宜しくお願い申し上げます。

令和6年4月1日に公益財団法人陸修偕行社が誕生してから、早や2年が経過しました。当社が公益財団法人偕行社と陸修会の合同であることは申し上げるまでもありませんが、共に目的とした「陸上自衛隊に対する支援・協力を通じて日本国の安全保障に寄与」をより積極的に果たすべく、意欲的に活動しております。

会員の皆様をはじめ、関係各位の御尽力・御協力に改めまして御礼申し上げます。

ところで偕行社の「偕行」の由来は詩経、国風・秦風「無衣」の第3章から引用されたものといわれております。

豈曰無衣（あに衣なしといわん）…衣を持っていないとは言わないが

與子同裳（子と裳をともにす）…君とはかまをともに着よう

王于興師（王ここに師を興さば）…王が挙兵すれば

修我甲兵（わが甲兵を修めて）…わたしのよろいと武器をととのえて

與子偕行（子と偕に行かん）…君とともに戦いに行こう

秦風「無衣」は、勇敢と称される秦国の兵士が戦友とともに団結し助け合いながら出征する（戦う）詩であると広く解されております。

一方で東洋文字文化研究の白川静先生は、その著書『詩経中国の古代歌謡（中公文庫）』において、詩経中、同じ表題である唐風の「無衣」が衣に寄せて愛情を表した恋愛詩であることを例に、衣にまつわる秦風の「無衣」も同じ趣の詩として解説しておられます。そもそも衣は男女が相別れるときに贈ったもので、別れた人を偲ぶようすがであり、衣はすなわち「愛情のしるし」であるということです。

この秦風「無衣」は繰り返し形式の詩で、第3章において君とともに着る衣は「裳…はかま」ですが、第1章は「袍…

綿入れ」、第2章では「澤…下着・肌着」となっており、我が国の万葉人もそうであったように、出征する兵士が愛する妻・恋人の衣を着けて、ともに征く詩だそうです。

「偕行」の原典は勇ましい詩であると認識していたところ、これが恋愛の詩とは、大いに戸惑いました。しかしながら、浅学の身を承知で陸軍将校をはじめ諸先輩方のお叱りを顧みず言わせていただければ、この勇壮と愛情という一見対極にある解釈について、どちらかとするよりもどちらとした方が、血が通った人間味溢れる兵士個々の人物像と心構えが浮かび上がる様な気がするのです。

すなわち、出征のための愛する人との別れ、心残りと不安、そしてそれを掻き消す情愛の証としての衣をまとった、あるいは衣に守られた一人一人の兵士が集い、更に戦友として衣を分かち合う固い絆と友情・信頼に結ばれて勇猛果敢に戦に臨む。相反する「偕行」を両立させることで、愛する祖国のため、愛する人たちのために征夫となる大義と覚悟をより強く感じます。

一方で陸修会は陸上自衛隊幹部退官者の会であり、「陸修」は現職の陸上自衛隊幹部自衛官の団体（修親会）を通じて陸

上自衛隊の充実・発展を支える意を体したものです。

陸修偕行社は、「陸修会と偕行社が合同したこと」及び「偕行社の良き伝統を引き継ぐ組織であること」を明確にするとともに、「古より国家防衛の最後の砦としての志を同じくするものが、現職幹部自衛官を支えるため、共に行動する会（偕行）である」との意味を込めた名称です。

我々は「英霊に敬意を。日本に誇りを。」を胸に刻みつつ、既に制服・迷彩服を脱いではいるものの、奉職した陸上自衛隊の幹部としての魂・矜持は忘れることなく身に着けているとともに、陸上自衛隊に対するロイヤリティも未だ色あせず

に堅持しております。

公益財団法人陸修偕行社は、愛する祖国日本、愛する日本国民のため、常に陸上自衛隊・自衛官各位と共に在り、偕に行かん。